

「わかる」ことが体育の技能向上に与える影響

—ボール運動の授業実践を通して—

井上芽衣 (M19EP013)

1. 研究について

(1)背景

体育の授業における「わかる」と「できる」の問題では、“できることとわかることの統一”が言われている。「わかるとできる」の認識における問題の強調は、とりわけ1970年代の後半以降の体育科における学力問題に対する議論の中で顕著になってきたものである。授業論としては、特に学習主体である子ども内面性を問題にする観点から教師の教授活動のあり方が問われた。この問題の広くは、生涯体育・スポーツといった社会的要請に対して、学校・教科の役割が問い直されたと考えられている。「わかるとできる」の論議は、単なる知識教育の次元を越えて運動学習における認識と技能の問題へと発展し、「体育の授業ではうまくするだけでよいのか」という問題意識に基づいて、わかるとできるの統一を求める実践がさまざまな姿で報告されるようになった。

わかるとできるの統一は主として、技能の獲得や向上だけでなく、運動技術の分析・総合（技術認識）の能力の獲得を目指した授業実践を行うことと言われ、「わかる」ことに関する議論は、体育の教科論、教科内容論、授業論にまたがった問題だと捉えられている。さらに運動学習における論理的認識は技能習得に対して、いくつかの位相が現れよう。今の自己のできばえの事実・現実の認識、何が学ばれるべきかの課題性の認識、どのような解決・練習様式がとりうるのかという方法についての認識など、わかるべき対象は変化する。また、それらの認識対象に応じて、教材・教具づくりや教授行為のあり方が検討される必要があると言われている。

これらのことを踏まえ、体育の授業において「わかるとできる」の統一ができれば体育の運動技能も向上するのではないかと考える。

(2)目的

「わかる」ことで「できる」を実感し、体育の技能が向上するのかを検討することを目的とする。

2. 研究の方法

(1)対象

実習校：山梨県公立小学校
期 間：2019年5月～12月
児 童：第6学年児童(31名)
単 元：ボール運動(バスケットボール)

(2)実施方法

- ①参与観察：参与観察を通し、運動・体育に対する児童の実態、授業の手立てを明らかにする。
- ②アンケート：運動・体育、特にバスケットボールの技能に関する自己評価アンケートを研究単元の前後に実施し、児童の変容を明らかにする。
- ③授業実践：①②を踏まえて授業実践を行う。学習に書かれた児童の感想、授業のビデオ映像から検討する。

3. 結果と考察

(1)事前アンケート（11月初旬実施）

本アンケートを用いて、学級の実態把握とバスケットボールに対する知識や意識の把握を行った。

アンケートの項目と結果を以下に示す。

- ① バスケットボールが好きですか？きらい

ですか？

好き 96.8%

きらい 3.2%

② ①についてそう思う理由を書いてください。

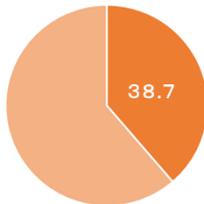
楽しいから、達成感があるから61.3%
パスやシュートができる嬉しい16%

少数意見として、チームで団結できること、絆が深まることに良さを感じるから、習い事でやっているからなどが挙げられた。

また、バスケットボールがきらいと回答した理由としてバスケットボールは上手い人だけが目立つからであった。

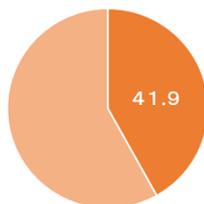
③バスケットボールにおけるボールを持たない動きがわかりますか？

④バスケットボールにおいてパスをもらう時の動きがわかりますか？



■わかる ■わからない

③バスケットボールにおけるボールを持たない動きがわかりますか？



■わかる ■わからない

④バスケットボールにおいてパスをもらうときの動きがわかりますか？

バスケットボールにおけるボールを持たない動きがわかると回答した児童は38.7%、バスケットボールにおいてパスをもらう時の動きがわかると回答した児童は41.9%であった。事前アンケートの③、④の結果からバスケットボールをする際に必要な動きを理解している児童は全体の半数以下であることがわかった。

⑤味方からパスをもらいたい時あなたならどう動きますか？

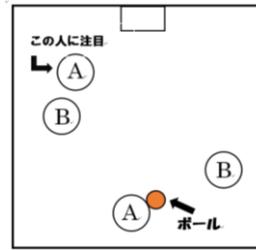
声を出す、名前を呼ぶ 61.3%

敵がいないところ、味方がもらいやすいところでパスをもらう 22.6%

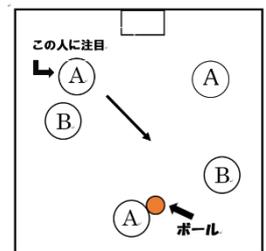
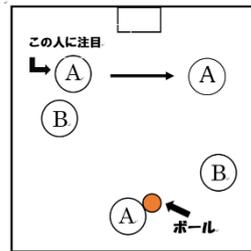
少数意見として、ゴールの近くでパスをもらう、味方の近くに行き行ってアピールをする、手をあげて敵より先にパスをもらい

にいくなどの意見が挙げられた。

⑥動きについて図示する問題



④の人の動き方についての質問です。(この人に注目の人)
④の人が味方にパスをもらうためにはどう動けばよいでしょうか。線を引いて動きを表してみましょう。



54%が回答

19%が回答

上記の回答以外にも3種類の回答があった。

⑦なぜ⑥のように図示したのですか？理由を書いてください。

ゴールに近いところでパスをもらえる、相手がいなくてパスをもらえる、ボールを渡しやすいから、ディフェンスにパスカットされないようにするため、ゴールに近づいてシュートをするためなどが挙げられた。

(2)授業

I 単元名

ボール運動 (バスケットボール)

II 教材観

本単元では、パス、ドリブル、シュートといった基本的な技能の習得を目指す。また、バスケットボールは団体で行うスポーツなので、仲間と協力し、仲間を思いやる心を育むことを目的としている。また、学習指導要領の中にボールを持たない動きの理解の重要性が述べられており、本単元でもボールを持たない動きの習得のためにミニゲームを行ってきた。基本的な技能から考える内容までを取

り入れ、最後にリーグ戦で色々なグループと試合を行うことで、自分の力がどれだけついたかがわかるようになっている。

III指導観

本單元では、自分の研究との兼ね合いもあり、「わかる」ことで「できる」ようになるのではないかということを検証することを目的として授業を組み立てた。ただ運動ができるだけでなく、どうしてできるのか、どうしたらこの動き方ができるのかを児童が理解できるような授業を展開することを心掛けた。毎回めあてを工夫し、本時の授業ではこれをするというように目標を明確にしてゴールがわかるような授業を行った。また、ミニゲームを毎回取り入れ、より実践に近い練習ができるようにした。教師側の声掛けとして、安全に留意することを心がけ、危険なプレーやルールを守っていない児童がいたらすぐに注意した。ミニゲームの最中にも授業のポイントを所々で言いながら児童の様子を観察した。

IV単元の目標

知識及び技能
運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、その技能を身に付け、簡易化されたゲームをすること。 ウ ゴール型では、ボール操作とボールを持たないときの動きによって、簡易化されたゲームをすること。
思考力、判断力、表現力
ルールを工夫したり、自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだりするとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること。
学びに向かう力、人間性等
運動に積極的に取り組み、ルールを守り、助け合って運動をしたり、勝敗を受け入れたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に気を配ったりすること。

V単元の評価規準

運動への関心・意欲・態度
<ul style="list-style-type: none"> ・ルールやマナーを守って、安全にゲームをしようとする。 ・友達と助け合って練習やゲームをしようとする。
運動についての思考・判断
<ul style="list-style-type: none"> ・楽しいゲームの行い方やルールを理解している。 ・自分のチームの特徴に応じた作戦を立てて、振り返っている。
運動の技能
<ul style="list-style-type: none"> ・基本的なボールの操作ができる。 ・ボールを持たない動きができる。
運動についての知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ・バスケットボールの基本的なルールやバスケットボールの歴史について理解している。

VI単元計画

1	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・試しのゲーム
2	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールを持たない動き（敵のいないところでパスをもらう）の習得 ・ミニゲーム（3対2、攻撃優位）
3	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールを持たない動き（守りの動き、敵のシュートやパスを防ぐ動き）の習得 ・ミニゲーム（3対2、守り優位）
4	<ul style="list-style-type: none"> ・友達のプレーを見て、良さやコツに気づく ・中間ゲーム ・これまで学んだことを試合で生かす
5	<ul style="list-style-type: none"> ・シュートの練習
6	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールを持たない動きのまとめ ・ミニゲームを通して次時からのリーグ戦に備える
7	<ul style="list-style-type: none"> ・リーグ戦
8	<ul style="list-style-type: none"> ・リーグ戦 ・まとめ

VII. 授業の要点

新学習指導要領では、以下のように明記さ

れている。

E. ボール運動 (1)知識及び技能

(1)次の運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、その技能を身に付け、簡易化されたゲームをすること。

ア ゴール型では、ボール操作とボールを持たない動きによって、簡易化されたゲームをすること。

実習期間中に行った授業では、ゲームの中のボールを持たない動きに注目して授業を行った。例をあげると、バスケットボールをするとき、ボールを保持していない児童に着目する。パスをもらう動き（どこに動けばしっかかりとパスがもらえるか）、守りの動きに加え、どうやったら適切な位置でシュートを打てるかなどの動きであった。このようなボールを持たない動きを児童が習得するために、授業の中で簡易化されたゲームを取り入れた。簡易化されたゲームは、ルールを変えたり、用具や場所を変えたりしてゲームを簡易化し、ボールをできるだけ多く触り、ゲームに参加することができるようにするものである。これは上記で示した新学習指導要領にも記載されており、簡易化されたゲームを授業の中で取り入れることは非常に重要だと言える。

VIII. 授業実践 (ボールを持たない動き)

ここではバスケットボールの単元、特にボールを持たない動きの習得を目指した第2、3、4回の授業の中身について説明していく。

○第2回

めあて：敵がいなくて動いてパスをもらおう

目的：パスをもらう動きを身に付ける
敵がいなくて動いてパスをもらう動きを身に付ける

ゲームのルール

- ① 3対2で3人が攻撃、2人が守りで行う
- ② 攻撃側はドリブル禁止でパスのみでゴールを目指す
- ③ シュートはせず、ゴール下の味方にパスを

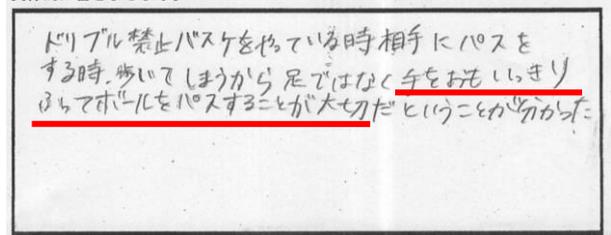


したら1点

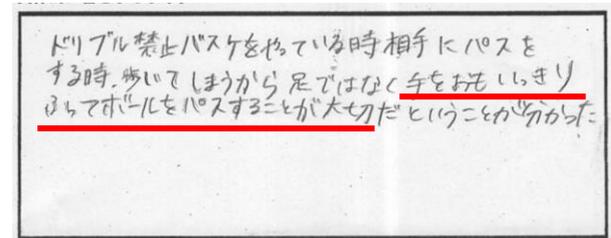
実際に授業を行ってみて、児童の人数も3対2と正式な試合よりも少なく、コートも狭いので積極的に動く児童が多くみられた。

以下は児童の学習感想である。なお、以降で出てくる抽出児は女兒1名であり、運動が好きではあるが得意ではない児童であった。

抽出児



他の児童



○第3回

めあて：守って守って敵のシュートを防ごう

目的：守りの動きを身に付ける

パスをカットする動き、シュートを防ぐ動きを身に付ける

ゲームのルール

- ① 3対2で3人が守り、2人が攻撃
- ② 攻撃側ドリブルあり、ただし一人での突破は禁止
- ③ 守りがボールをとったら守りの勝ち



写真は攻撃側のパスをカットしようとしているところである。

攻撃側のパスをカットするために自分の手を精一杯伸ばしたり、ジャンプしてボールを取りにいったりと、児童自身で動きを工夫している様子が見られた。

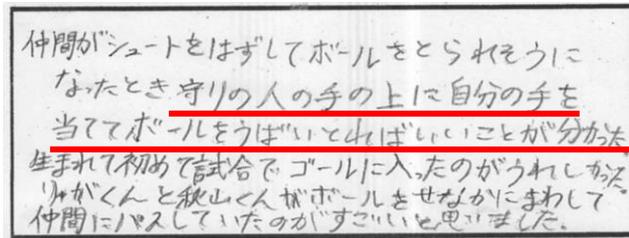


上の写真は攻撃側の人に対し、マークについているところである。

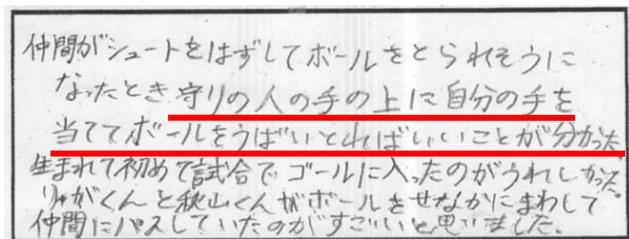
この授業では、守ることに焦点を当てて授業を行ったので守りへの意識が高まり、ボールに食らいついたり、人をマークして動いたりする児童の姿が多く見られた。

以下は児童の学習感想である。

抽出児



他の児童



○第4回

めあて：友達の動きを見て良いところを見つけよう

目的：見本となる児童の動きを見て、知識として学んだことを復習するため。新たな気づきを得るため。「わかる」という感覚を身に付ける)

方法：代表4名(攻撃2名、守り2名)で2対2で行う。

①攻撃2名に注目する時間

②守りの2名に注目する時間

を設け、周りの児童はそれぞれどこがよかったか、どんなことを工夫していたかなどを伝える。



実際の様子

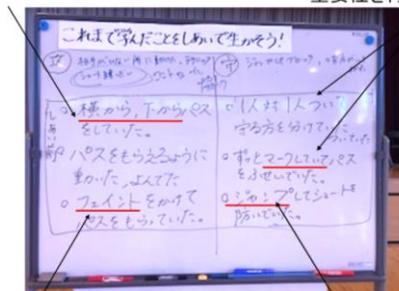


全体で共有

以下が実際この活動を通して児童たちから出た意見である。

パスの出し方への気づき

授業で習ったことの重要性を再認識



前回まで学習していないレベルが一つ上の気づき

パスの出し方への気づき

IX. 授業のまとめ

これまで述べた第2～4回の授業を行ったことで、授業前と授業後を比較して児童の運動技能がどう変わったのかを述べていく。

○試しのゲームー全体ー



試しのゲームでは、それぞれが自分のポジションに入ったりせず、ボールに向かってみんなが動いている。

○試しのゲームー抽出児ー



抽出児の動きを見ると同じ場所からほとんど動いていなかった。

○最後のゲームー全体ー



攻撃側が均等に散らばり、相手のマークを外している様子が見られる。



児童がいる。

最後のゲームー抽出児ー



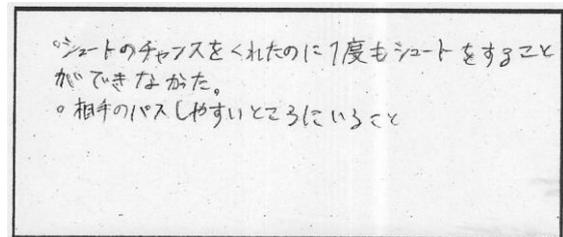
素早く相手がいなスペースに走り込み、ゴールを狙いにいっている。

○抽出児について

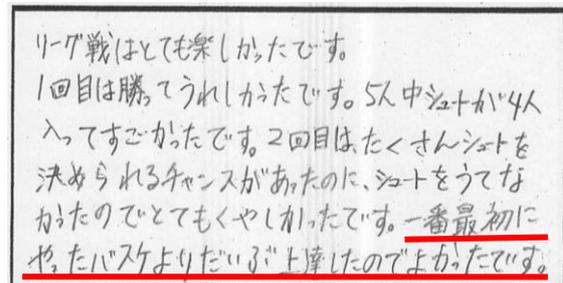
試しのゲームでは同じ場所からほとんど動かなかった児童が、最後のゲームでは積極的にコートを走り、空いているスペースを見つけ、シュートを放っていた。これらの様子からボールを持たない動きへの理解が深まっていることが考えられる。

○抽出児の学習感想の変容

初回の授業



最後の授業



初回の授業と比較すると、最後の授業の授業感想は、内容がより具体的になっている。最後の授業の感想の中に“たくさんシュートを決められるチャンスがあったのに”とあるが、これは抽出児が自分で考えて動き、ボールを持たない動きがわかり、シュートを打てる状況を作ったことが想定される。初回の授

業と比較した大きな成長といえる。そして適切な自己評価ができていているといえる。

(3)事後アンケート

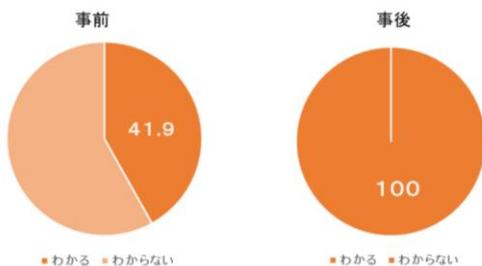
アンケートの内容は、事前アンケートの箇所に示したので省略する。以下事後アンケートの結果を事前アンケートの結果と比較したものを示す。

○バスケットボールにおけるボールを持たない動きがわかりますか？



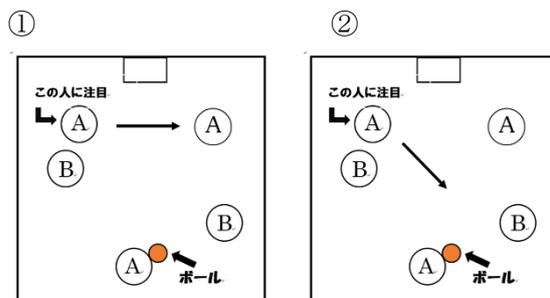
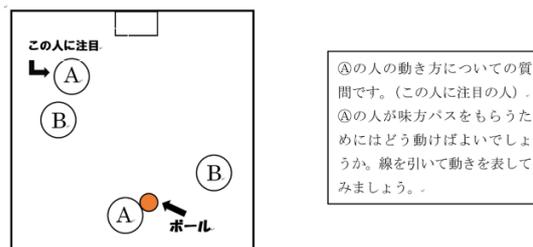
事前アンケートで、ボールを持たない動きがわかると回答した児童は全体の38.7%、事後アンケートでは90%の児童がわかると回答した。この結果から、事前アンケートに比べ事後アンケートの方がボールを持たない動きがわかると回答した児童の割合が高くなっていることが言える。

○バスケットボールにおいてパスをもらう時の動きがわかりますか？



事前アンケートでわかると回答した児童が半数以下であったのに対し、事後アンケートでは100%の児童がわかると回答している。授業のなかでもパスをする動きに重点をおいて行ったこともあり、事後ではすべての児童が「わかる」と回答している。

○動きについて図示する問題



①のように回答した児童は、事前アンケートでは54.8%、事後アンケートでは87.1%であった。事前アンケートよりも事後アンケートの方が①のように図示した児童が多いことがわかった。事後アンケートでも②と回答した児童が3%いた。

- ・ゴールに近いところでパスがもらえるから。
- ・敵（相手）がいないところでパスがもらえるから。
- ・ボールを渡しやすいから。
- ・仲間に近づけ、シュートをしやすいから。
- ・敵から離れてフリーの状態をつくるため。
- ・安全にパスができるから。

以上が①のように図示した理由である。

4. 成果と課題

成果は、以下の4点である。

第一に、ボールを持たない動きに重点を置いた授業を行った後の方が「わかる」を実感した児童が多かった。特に第4回の友達の動きを見て良いところを見つけようの授業後は、学習感想にも多くの児童が様々な気づきを記していた。その後のゲームでも空いているスペースに自分から動いたり、声を出してパスをもらいに行ったり、積極的に動いていた。自分で「わかった」ことを表現しようとする児童が多く見られ、積み重ねた授業が結果に

つながったと実感した。

第二に、最後のゲームでは、試しのゲームよりもボールを持たない動きを行っている児童が多く見られた。試しのゲームでは、ボールに集まって動くことが多かったが、最後のゲームでは、自分の役割を理解し、プレーできている児童が多かった。

第三に、学習感想の記述から、「わかる」を実感できた児童は、最後のゲームの中での動きに成長が見られる傾向にあった。

最後に、考えてプレーをすることに楽しさを感じる児童もいた。ある児童の学習感想の中に、「バスケットボールのルールやコツを理解できて、以前より考えてプレーができるようになった。考えてプレーすることが楽しい。」と記述されていた。考えてプレーする楽しさに気づけたことは大いに評価しえることだと考える。

課題は以下の3点である。

第一に、児童の実態に応じたゲームの工夫である。今回行ったボールを持たない動きを習得させる授業では、攻撃側と守り側で人数を変更し、攻撃優位、守り優位でミニゲームを行った。しかし人数とコートの広さを変えただけでは「児童が楽しい！おもしろい！」と思えるゲームだったとは言い切れない。だからこそ来年度授業づくりをするときには、人数や場の工夫だけでなく、教材やルールを工夫してより中身の濃い授業を目指していきたい。

第二に、児童が自分の動きを見る機会をつくることである。今回毎回の授業の様子をビデオカメラで撮影していたのだが、その撮影したものを児童に見せる時間をつくることができなかった。体育の授業においてメタ認知的な観点からも自分の動きを自分で見て、分析し、それをもとに自分の動きを改善することが非常に重要になってくる。その機会を積極的につくるのが本研究においても非常に重要だと実感した。だからこそ来年度 ICT 機器を適切に活用しながら児童が自分の

動きを見る機会を十分につくっていききたい。

最後に、感想等のインタビュー調査についてである。今回児童の授業感想は、毎回の授業で書いてもらった学習カードの感想の部分を引用した。しかし、感想の中にはめあてと噛み合わない記述があったり、「楽しかった」、「おもしろかった」など具体性に欠けたりする記述なども見られた。だからこそ授業の終わりに抽出児や変化が見られる児童などにインタビューという形でより具体的な意見を聞く必要があるのではないかと考えた。研究を行う上で、現場の声や核心を突く言葉の使用が求められていると感じる。来年はより多くの情報をあらゆる形で収集し、わかりやすくまとめられるように努力していきたい。

5. 引用・参考文献

- ・福ヶ迫義彦 (2005) 小学校授業におけるゲームのミニ化の意義, 愛知教育大学保健体育科講座研究紀要, 30 巻 pp.27-32
- ・岩田靖 (1995) 体育授業における「わかる」と「できる」—特に、体育授業における認知的側面の議論について—, 日本体育学会大会号, pp.129
- ・森知高 (1994) 「わかる」と「できる」の一考察—体育の授業を通して—, 体育・スポーツ哲学研究, 16 巻 1 号 pp.29-40
- ・柴田善松, 大貫耕一, 西田佳 (2008) 高学年の体育, 株式会社日本標準
- ・小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説体育編, 文部科学省
- ・高橋健夫, 松本富子 (1995) 体育授業における「わかる」と「できる」, 日本体育学会大会号, pp.128